穹蒼高く夜は深く
はぼぞらたか
より
ふか 沈黙の杜に聳えたつ

北斗の冴に君見ずやほうと 「吾が若人よ汝が野心 の梢指すところ

われにかも似て崇くあれ」

荒ぶ吹雪のもだすとき

兀

塞つる力を君よ知れ 皎たる天地塵絶えて

身を練り魂を磨かずや」 六片の花咲くところ 「吾が若人よ北の曠野に

> 春の息吹に渡り行くはるいぶきもたり 楡の若葉に陽はこぼる にれ やかぼ ひ 谷に間ま 自由の郷土ぞ幸多き」 時鐘の響に君よ聴けかねのびきを表をき 「吾が若人よ石狩は の百合の香のゆらぎ

十つの 美しき国の自治の家に 百鳥歌ひ花は笑む 祝歌たかく君歌へ の春今日来る

住家よ永に栄あれ」 「迪に恵ふ若人の」

Ŧ.

吾若き力強ければ 健児が行手遠けれど ゆくてとお 真理を求むる一百の 鐘に自由を学びつつかね じゅう まな 崇きのぞみを星に懸け

贏む秋は近からむ など 贏 ざる事あらん